

#書評

本欄で紹介した書籍は、読者アンケート(p.1133)にご回答いただいた方に、抽選でプレゼントいたします。



今日からでも目の前の患者に適用できる実践書

評者 筒泉貴彦 愛仁会高槻病院総合内科主任部長

「筒泉先生、米国ではケア移行 (transition of care) はやっぱりすごいんですか？」

これは、私が練馬光が丘病院で勤務している際に、本書の編者である小坂鎮太郎先生よりいただいた質問である。

評者は米国で内科レジデントとしてのトレーニングを受けたが、恥ずかしながら「ケア移行」という言葉にはそれほどなじみがなかった。しかし先輩である手前、「そ、そらそやろ」ととっさに返答し、すぐに得意のコソ勉でケア移行について猛勉強したことを今も覚えている。タイミングよく『Annals of Internal Medicine』の有名コーナーである「In the Clinic」でケア移行の特集があったため熟読したが、そこで強調されている内容が当時の内科レジデントにおけるトレーニングに十二分に組み込まれていることを知った際は大変驚いた。やはり米国の実践的教育はシステマティックにできていることを、あらためて感じた次第である。

現場第一の若きスペシャリストたちによる日本ならではのケア移行

私自身が米国で経験したケア移行に関わる入院診療や申し送り、コードステータスを含めたアドバンス・ケア・プランニングなどについて、小坂先生を含む若手医師にできる限り伝えたいつもりだが、それをいかに日本の診療に落とし込むか、ということが課題であった。どうしても日本の医療システムや文化、保険診療などには米国との違いがあるため、簡単にコピーアンドペーストできる内容ではないからである。一方で、わが国においてケア移行の必要性は切実な問題となっていることもまた事実だ。かかりつけ医制度が米国と比べると厳しく規制されておらず、多くの患者が基礎疾患はもとより老年症候群やフレイルの影響で再入院を繰り返しているのは全国的な問題となっている。

本書は、私が米国で学んだ入院診療における断片的なケア移行を外来や地域にまで広げつつ、かつ日本において汎用性の高いものに昇華させた素晴らしい実践書となっている。ケア移行はいろいろな場面において起こる。院内の転棟や退院時だけではない。外来への申し送りや地域ぐるみの対応を行うときにも必要となる。その際に実に多くの職種および患者・家族との良好なコミュニケーションが必要となる。想定しうる状況ごとにエビデンスを多分に含めた丁寧な実践的な記載であるため、今日からでも目の前の患者に適用できる。

執筆陣には若手医師を多く登用している。経験がまだ少ないと侮ってはいけない。彼女らはまさに現場の患者を目の前にし、日々鍛錬を積み重ねている現場第一のスペシャリストである。私のたどたどしいケア移行の教育が有望な後輩たちにより熟成され、本書の完成となったことを大変うれしく思う。次の世代である読者のみなさんが本書から質の高いケア移行を学び、それが日本全国におけるスタンダードとなるほど浸透していくことを切に望む。



外来・病棟・地域をつなぐ ケア移行実践ガイド

小坂鎮太郎、松村真司＝編

定価：3,850 円 (本体 3,500 円＋税 10%)
B5 判・184 頁／医学書院／2022
[ISBN978-4-260-04885-9]